

## メッセージ

池田大作

北京大学日本研究センター池田大作研究会と東洋哲学研究所の共催による国際学術シンポジウムの開催、まことにおめでとうございます。

また、ご多忙のなか、ご列席いただいた各大学の諸先生方に心より御礼申し上げます。さらに日本からは、私の創立した創価大学の代表も参加しております。

東洋思想を専門にされる各分野の諸先生方と私も研究所の研究員が、「二十一世紀の東洋思想の展望」をテーマに多様な視点から論究し合うことに深い意義を感じております。西洋近代に発する科学技術を駆動力

とする現代文明は、人類に物質的豊かさや利便性をもたらし、通信、情報、交通機関の飛躍的発達とともに、地球を一体化しつつあります。

しかし、その一方で、こうしたグローバルゼーションは、地球環境問題、核拡散、貧富の差の拡大、難民の急増、民族・宗教・文化のかかわる紛争といった深い「闇」をひそめています。三年前に起こった「九・一一」の同時多発テロは、その象徴といえましょう。

それに引き続き、多くの一般市民を巻き込んだ無差別テロが世界各地で続発し、ますます激化する様相と

を示しています。そこでは、「憎悪」と「不信」が増幅し、「分断」のエネルギーが、人類を引き裂いております。

しかし、人間生命には「慈悲」や「信頼」といった「善性」をも豊かに内包しております。「善性」は、人類を「結合」させるエネルギーであります。人間生命に内在する「善性」の連帯をもって、「悪性」の力をコントロールしゆくことが、文明転換への「要」となりましょう。

東洋思想には、「憎悪」と「報復」を、「慈悲」と「報恩」へと変革しゆく「人間主義の智慧の光」が、ダイヤモンドのごとくきらめいております。

三十数年前に私と対談したトインビー博士は、科学技術の圧倒的な進展につれて、道徳性、倫理性、精神性が停滞し、そこに人間同士の断絶が生じると喝破し、近代物質文明の危機の本質は「モラリティー・ギャップ」にあると指摘されました。つまり「善性」の衰退による人類の倫理的、道徳的水準の低下であります。そして博士は、それらを克服し、人類の倫理性を向上

させゆく大いなる力として、「中国民族が身につけてきた『世界精神』」に希望の光を見出しておりました。「世界全体に、政治統合と平和をもたらす」国として中国に最大の期待を寄せていたのであります。トインビー博士との語らいを終えた翌年の一九七四年五月、私は念願叶って、初めて中国を訪問しました。

以来、私の訪中は十回を数え、懐かしい北京大学への訪問は七回に及んでいます。微力ながら、民間レベルでの文化・教育交流の道を率先して開き、日中友好交流を深めようと努力してまいりました。

中国の方々との交流を通して私が強く感じたことは、トインビー博士が「世界精神」の内実として挙げていた「数々の美質」が、二十一世紀の人類にとつてますます重要性を増しているということでした。

その第一は、中国文明史を彩る「共生」の思想であります。これは、人類と大自然、人間と人間が共に生き、支え合いながら、共に繁栄していこうという精神であります。

そしてこの「共生」の思想の典型が、中国思想の精

髓である「天人合一」論であり、さらに近代儒学思想の太い水脈を形成していた「大同」思想であります。

「天人合一」論では、天道と人道が、その根本で一致しており、人間は心や性の中に、天の性質、徳をそのまま持ち合わせていると主張します。北京大学の季羨林教授は中国思想史を貫く「天人合一」論を深く検討して、「天」とは大宇宙、大自然であり、「人」とは人間であるとの説を立てておられます。大自然と人類との「共生」の思想こそ、二十一世紀の人類への最大の貢献となりましょう。

また、「大同」思想には、すべての人間が理解し、共感し合い、苦楽を分かち合っているという「共存」の精神性―「仁愛」の情が脈打っております。康有為は、「大同書」のなかで、「大地に生を受けたからには、地球上の人類はみな自分の同胞であり、彼らを知れば、そこに親愛の情がおこる」（中国古典新書『大同書』、坂出祥伸著、明德出版社）と記しています。

このような「共生」「共存」の思想は、仏教で説く「縁起」の法理とも通底しています。仏教では、大自然も

言えるでしょう。

六世紀に荘厳な中国仏教の華を咲かせた天台は、その主著『摩訶止観』の中で、「仁慈もて矜あはれ養やしないて他を害せざるは、即ち不殺戒なり」（中村元訳）と述べ、「慈悲」を「仁」と同定しております。ここに「不殺戒」とは、仏教の生命尊厳を示す「慈悲」の戒であります。大乘仏教の倫理の基調である「慈悲」と、儒教の「仁」とは、その精神性、倫理性において通底しているとの指摘であります。

儒教の「仁」や中国仏教の「慈悲」に象徴される中国の「人間主義」の伝統こそが、トインビー博士の指摘された「モラリティー・ギャップ」を乗り越え、「戦争と暴力の世紀」を、「平和と非暴力の世紀」へと転換しゆく「主軸」をなすのではないのでしょうか。

このような中国精神の「伝統」を「現代」との格闘の中から、巧まらずして体現していった人物として、私の胸に思い起こされるのは、故・周恩来総理であります。

私が周総理にお目にかかったのは、逝去の一年前、

人間もすべての存在は「相資相依」の関係性にあると説きます。万物は、互いに資け合いながら、「共生」の姿を示すのが、宇宙のリズムに合致したあり方なのです。

私は、中国の伝統思想に説かれるような「共生」の思想が、時代精神として共有されていくところに、人類の調和と繁栄の道が開かれると確信しております。

中国思想の美質の第二として挙げられるものは、「共生」の思想を基盤として成立する「人間主義」の思想であります。

中国思想はひたすら人生の目的を追求し、人間という座標軸を離れることはありませんでした。それ故に、中国史を貫く「人間学」には、常に強烈な「倫理性」が満ちていました。例えば中国の「人間主義」の結実として、儒教が提唱する「仁」があります。「仁」は、文字の起源からすると「人」と「二」から構成され、「人」が互いに向き合い、愛し合うということの意味しております。現代的に展開すれば、ヒューマニズム・人道への目覚めであり、広くは人類愛への目覚めとも

今からちょうど三十年前の一九七四年十二月のことでした。

中国はおるか、世界中が頭に入っているかのような記憶力。私生活の質素さ。側近や親族に、自分の名を利用することを許さなかつた清廉さ。徹して人民への奉仕を貫いた大誠実の振る舞い。外国人を迎えるときなどのきめ細やかな心配り。

私との会見も、周総理は病氣療養中であつたため、北京市内の病院での会見となりました。病状が悪いにもかかわらず、わざわざ病院の玄関まで出迎え、帰りには見送ってくださいました。礼節を尽くされるその姿が、今も胸奥に焼きついて離れないのであります。

二十一世紀を展望した周総理の深き言々句々は、日中両国をはじめ、世界の大同団結を願う心情があふれておりました。

さて私は一昨年の秋、日中国交正常化三十周年を記念して、北京大学の季羨林教授、中国社会科学院の故・蒋忠新教授と、てい談『東洋の智慧を語る』を発売しました。その中で私たちは、「東洋」と「西洋」の

思考法にみられる「共通性」と「相違性」について論じ合いました。

その結論として、季教授は、二十一世紀の「人類文明」のあり方を次のように指し示されました。

「正しいあり方とは、西洋文化の数百年にわたるあらゆる功績を継承し、東洋文化の総合思考をもって西洋文化の分析思考の窮地を救い、全人類の文明をさらに高い、さらに新しいレベルに発展させていくことである」と。

今、東洋思想に求められているものは、「東」と「西」といった二元論的な対立思考を超えて数千年の歴史の中で培ってきた「世界精神」を全人類のために活用し、輝ける「人類文明」創出への精神的「光源」となることではないでしょうか。

このたびの歴史的なシンポジウムが、東洋思想の輝かしい「智慧の光」で、二十一世紀を照しゆくものとなることを願っています。

(いけだ だいさく／創価学会インタナショナル会長)